

# 論文要約

水産物流通システムの動態に関する地域的研究

前田竜孝

(文学研究科文化歴史学専攻地理学地域文化学領域)

本研究の目的は、ローカルな流通システムがどのように変化してきたかを、漁業者や漁協関係者、仲卸業者、流通業者といったステークホルダーの活動とそうした人々を取り巻く集荷・出荷、流通環境における関係性を考察することを通じて明らかにする。

第1章では、漁業地理学と漁業経済学によって進められてきた水産物流通の地域的研究の動向を整理した。そして、両分野の方法論的な特徴を明らかにした上で、近年の日本の水産物流通をめぐる社会経済的状況と流通に関係する主体の相互作用に注目した方法を提示した。この方法に基づいて、第I部「生産地と主要消費地との地理的関係性と水産物流通」(第2章, 第3章, 第4章), 第II部「社会経済環境の変化と水産物流通」(第5章, 第6章, 第7章)という2つのテーマを立て、各地の流通システムを検証した。

第I部では、大都市を中心とした消費市場と水揚げ港が所在する漁業地域との距離関係に注目し、これが経営体の出荷行動にどのような影響を及ぼすのかを検討した。

第2章では、最新の統計情報である2013年漁業センサスを用いて、近畿地方の漁業経営体による出荷行動の特徴を把握した。特に、都市に所在する中央卸売市場と近畿地方の漁業地区との位置関係、及び各漁業地区の主たる漁業種類に焦点を当て、両要素が各地区の経営体の出荷行動に強く影響している点を明らかにした。

統計分析を踏まえ、第3章では都市近郊の漁業地域として大阪府岬町深日漁業地区を、第4章では遠隔の漁業地域として兵庫県南あわじ市南淡漁業地区を取り上げた。その結果、地域の流通システムが主要消費地との距離関係から影響を受けつつ変化してきた状況と、こうした流通環境のもとでの各主体による出荷行動の特徴を明らかにした。

第II部では、ローカルな流通システムの制度的な変化について通時的な視座から検討した。具体的には流通システムの変化に各主体がどのように関わってきたのか、また流通環境が変化する中で漁業経営はどのように影響してきたのかを考察した。

第5章では愛知県西尾市一色町の養鰻業における生産技術の革新が、水産物流通の起点となる集出荷作業にどのような影響を及ぼしたのかを検討した。その結果、技術革新が進むにつれて、生産者間で協力して行われていた作業形態が変容し、地域内でも経営体ごとに多様化していく様子が明らかとなった。

第6章では、大阪府岬町で2017年に始まった直売形式での水産物の販売が深日漁協の漁業経営体に与えた影響を、経営分析と生態人類学的な調査を通じて考察した。その結果、直売の活用・非活用をめぐる各経営体の意思決定の背景にある経営的な要因と、直売の開

始に伴う漁業活動の変化が解明された。

第7章では、大阪府の船曳網漁業において、2014年より始まった入札取引がどのように導入され、その後各経営体に普及していったのかを検討した。大阪府鰯巾着網漁協のリーダーシップがその導入に大きく作用したものの、普及段階では魚価の変化を見極めた上で参加するかどうかを決める各経営体の主体的な意思決定の存在も認められた。

以上の事例研究の結果からは、地域の流通システムは、取り巻く社会経済的環境、自然的環境とそこから作用を受けた様々な主体の活動との関係性の中で形成され、変容していく点が明らかとなった。地域的研究を通じて、流通システムがいかに変容してきたのかを捉えることができた。地域における将来的な流通環境の展望にも有効となろう。